

## 筑前国怡土庄故地現地調査速報

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1520164>

---

出版情報 : 1999-12-31. 服部英雄研究室  
バージョン :  
権利関係 :



置はまず村落（村落上層の名主ら）に、次には藩権力に対して要請された。

波多江での早米献上は、オリジナルには領主波多江氏の用作田における種粳確保を示していよう。波多江氏は近隣農民の労働奉仕により、種粳としての保存用の米を確保する。農民も勸農（危機管理）上それが必要と考え、自らの意志で参加した。元来はここで自己完結したのだろうが、波多江氏はさらにそれを上級領主（ここでは黒田氏）に献上した。

年貢米の完納時には領主側の接待のあったことが知られている。「たわらかさね絵巻」ほかの史料にみえる「倉付けの酒」、「収納の酒」がそれである（久留島典子「領主の倉・百姓の倉」＜『朝日百科日本の歴史別冊、家・村・領主』＞）。お蔵に俵を納めることにより領主から杯を頂く。黒田家と波多江家との早米献上の光景は、そうしたならわしを継承したもののように思われる。

## 5 天正中・後期における筑前国志摩郡城郭の様相

中西義昌

### 〔はじめに〕

筑前国志摩郡は、怡土庄の庄域であった糸島半島北部に位置する。この地域には、天正中・後期を下限とする城郭遺構が数多く残されている。しかし、踏査に基づいた縄張り図の作成は行われず、資料化の作業は遅れている。このため城郭遺構から在地の権力的様相を読み解く研究は皆無に近いのが現状である。しかしながら、近年、この地域では大規模な開発事業が予定されており、今後、大規模な景観の変化が予想される。このため早急な資料化が求められる。

その中で、筆者は福岡平野周辺の城郭遺構を悉皆的に踏査する機会を得た。本来なら、各地域における存在形態を比較検証することで、天正中・後期の地域権力の様相や在地構造について考察を行うところである。しかし、今回は紙面の関係もあって、志摩郡内の山城・丘城の紹介と若干の概説を行うこととしたい<sup>(1)</sup>。

なお、別稿で糟屋郡・席田郡・志摩郡の小規模城郭について、類型化を通じた考察を行っているので、参考されたい<sup>(2)</sup>。

### 【1】文献史料にみる天正中・後期の志摩郡

中世後期の志摩郡は、豊後大友氏系勢力の影響下にあった。同時代史料や後世の編纂史料からは、大友氏の郡代として、天文年間に臼杵安房守親連、永禄・元亀年間の臼杵安房守鎮統、進士兵衛鎮氏が確認されている。天正五（1577）年には木付鑑實が入部するが、隣接する原田氏（怡土郡の国人）の圧力を受け、天正七年に糟屋郡へ退転している。

一方、郡内の小規模在地勢力は、史料上では「志摩郡衆」として登場する。主な勢力として、元岡氏・小金丸氏・泊氏・古庄氏などが名を列ねている<sup>(3)</sup>。

### 【2】志摩郡の山城・丘城と在地勢力

各事例の検討に入る前に、志摩郡における山城・丘城とその築城主体を確認しておく。

志摩郡で最も規模の大きな城郭として、柑子岳城がある。その他、小規模な山城・丘城が数多く点在する（図1）。しかし、山城・丘城や在地諸勢力に関する文献史料は乏しく、同時代史料だけの確認作業は極めて困難である。そこで史料的価値は落ちるものの、後世の編纂史料（地誌・家譜・覚書・書上

など) や伝承を、危険のない範囲で用いる<sup>(4)</sup>。

これらの史料から抽出される郡内の山城・丘城および在地諸勢力は、表1-1。「志摩郡で確認される山城・丘城」と、表1-2。「志摩郡で確認される在地諸勢力」に示す通りである。更に、山城・丘城と築城主体を対応させたものが、表1-3。「志摩郡で確認される山城・丘城と築城主体」である。

### 【3】志摩郡の城郭遺構～各事例の検討～

#### [3-1] 大規模な拠点城郭……柑子岳城

柑子岳城(福岡市西区今津・草場)は郡内にて拠点的役割を担った城郭である。柑子岳城に入った志摩郡代は、柑子岳城督とも称されている。天文・元龜期には臼杵氏が、天正期には木付鑑實が入部している。しかし、天正七年に鑑實は立花山城に退転しており、その後は放棄されたようである。

柑子岳城の縄張り図(図2)をみると、城域は、柑子岳(254.5m)を中心とする南北の山塊に広がる。主郭部は、大きく曲輪Ⅰ・曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲに分化している。

曲輪Ⅰは、柑子岳の山頂を削平して構築されており、主郭部に相当する。現在は風倒木によって荒廃している。全体は三段の削平地に分かれており、削平の度合いは良好ではない。

曲輪Ⅰから北へ伸びる尾根筋には、堀切cが配されている。そして北方へ馬蹄状に続く部分を堀切aで切断している。また堀切a、c間の尾根には堅堀bがみられる。堅堀bは尾根の中央部に築かれており、尾根を破壊すると同時に、西側からの周り込みを防いでいる。ここより北側には曲輪や堀切などの遺構は確認されず、堀切aが城域の北端となっている。

曲輪Ⅰに対して、曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲの削平の度合いは良好である。曲輪Ⅱの東側斜面には堅堀状地形dがみられる。しかし、現況は流水によって抉られており、谷が崩落して堅堀状地形になっている可能性も想定される。

曲輪Ⅲは、二段の削平地Ⅲ-①、Ⅲ-②から構成されている。Ⅲ-①は、長さ40m、幅10mの削平地である。Ⅲ-①から東側に尾根筋が伸びる。そしてⅢ-②は、長さ35m、幅10mの削平地である。

南側に伸びる尾根をみると、曲輪川の真下に短い堅堀eと不明瞭な削平地が一段確認されるが、その先は、後世の植林の伴う平地がいくつかみられる程度で、堀切・畝状堅堀群などの城郭関連遺構は確認されない。しかし、尾根の南端部にある山塊には、南側斜面に面して不明瞭な削平地が確認される。構築時期は不明ながら、南側の尾根上にも軍団が配され、城域として機能した可能性が考えられる。しかしながら、曲輪の削平が部分的であったり、曲輪Ⅲとの間が自然地形のままであることから、この方向への防御の姿勢は積極的なものとは言えない。また、軍団の駐屯が恒常的でなかったものと思われる。

一方、曲輪Ⅲから東側に伸びる尾根を40m程下ると、曲輪Ⅳがみられる。曲輪Ⅳは、尾根の先端に橋頭堡のように築かれている。周囲の斜面には十二本の畝状堅堀群fが配されている。さらに下方に二本の堀切g・hを配し、尾根からの侵入を遮断している。畝状堅堀群と堀切は切合いとなっており、構築に時期差があった可能性が考えられる。

畝状堅堀群fをみると、両側に長い堅堀を配し、その内側を短い堅堀群で破壊している。また、堅堀群の下方には堀切gが組み合わせられている。このように、東側の尾根筋では畝状堅堀群と堀切を巧みに組み合わせた防御ラインが築かれており、実戦的な色彩の強いプランになっている。東側からの侵入に対する強い防御意識を窺わせる。

柑子岳城の縄張り上の特色を纏めると、

1. 比高差から曲輪Ⅰが主郭に相当する。しかし、縄張りの的には、北側の曲輪Ⅰと南側の曲輪Ⅱ・Ⅲが併置するプランになっており、主郭と下位曲輪が、縄張りプランの中で明確に区別されていない。

2. 内部の曲輪分化が不十分な反面、主郭部を囲む防御ラインの構築に高度な縄張り技術が駆使されており、防御ラインの構築に強い関心があったことを示す。
3. 筑前西部地域（福岡地方西部）では殆ど用いられない畝状堅堀群を積極的に駆使しており、軍事的な技術文化圏において、木付氏が周囲の在地勢力から遊離した存在であったことを窺わせる<sup>(5)</sup>。  
が挙げられる。

### 〔3-2〕志摩郡の小規模山城・丘城

次に志摩郡の小規模山城・丘城の検証を行う。まず、城郭群の諸様相を分析するために、筆者が提示した曲輪配置に着目した「小規模山城・丘城のタイプ化の基準」に従って分類を行う<sup>(6)</sup>。

タイプ化の基準は下記の通りである。

〔A類〕……遺構や文献史料・通称地名・伝承などから、城郭の存在が確認されないもの

〔B類〕……単郭構造、或いは複郭を持つ小規模な城郭

B-1類……文献史料・通称地名・伝承などから、城郭の存在が確認されるが、遺構を伴わないタイプ

B-2類……曲輪などの明確な土木遺構を持つものの、基本的に単郭構造をとるタイプ

B-3類……複数の曲輪に機能分化するタイプ

なお、志摩郡内では、B-3類の小規模山城・丘城は確認されない。

#### 〔3-2-1〕単郭構造の小規模な城郭（B-2類）

##### 〔1〕戸山城（福岡市西区桑原）

桑原集落の南東側の山上に位置する。本稿では小字をとって戸山城とする。『筑前国続風土記拾遺』（以下、『拾遺』）には、「又民家の上に大神出雲と云者の墓とて有。其邊に出雲か居宅二十間に三十間許の跡もありて堀切なと猶残れり。里民は城跡といへり。」とある<sup>(7)</sup>。また、城の麓に「オオガミノシロ」という通称地名がみられる。これらのことから、大神氏関連の城郭と考えられる。大神氏は豊後を本貫地とする国人の系譜と思われる。

図3が、戸山城の縄張りである。両端に堀切が設けられることで、単郭の曲輪Iが形成される。曲輪の長さは60m、幅は10m前後であり、細長い形状となっている。

曲輪Iの東端には土塁アが設けられており、堀切aと組み合わせることで南斜面への回りこみを阻んでいる。加えて、土塁がスロープ状の出入り口となり、明確な虎口ルートが設定されている。しかしながら、障壁としての役割と通路の役割が重複しており、障壁としての土塁が、そのまま虎口ルートとして援用されたものと評価される。

一方、西側は、三本の堀切（図中b）が連続して配されている。南側の尾根筋と西側の緩斜面から侵入が想定されることから、この方面への強い防御の意識を感じさせる。

戸山城は単郭構造であるが、堀切や土塁が駆使され、虎口ルートが設定されるなど縄張り技術では周囲の城郭から抜きん出たレベルにある。志摩郡代の与力衆として桑原に入部した大神氏が、周囲の小規模在地勢力に比べて頭一つ抜きん出た縄張り技術を展開していたことを示す。

##### 〔2〕浦城（志摩町大字桜井）

志摩郡北西部の桜井地区に位置する。『拾遺』では岩松古城として、「桜井村浦の上といふ所に在。故に浦城共云。」と紹介する<sup>(8)</sup>。字「浦の上」は、集落の北側の山地にあたる。山地には二箇所のピークI、IIがある。東側のIIには遺構は確認されないが、西側には曲輪I（I-①、I-②）が確認される（図4）。

浦城の縄張りをみると、曲輪Ⅰは南北二段であるが、北から南に向かって緩やかなスロープとなっており、基本的には単郭の曲輪と考えられる。Ⅰ-①には削り出しの土塁アがみられる。西側からの侵入に対して築かれたものとみられる。Ⅰ-②には墓石などが点在しており、後世に墓地として使用されていたようである。南西部に麓の集落へ向かう道の掘込みがみられるが、墓地への道の可能性も考えられる。

この地域の小規模在地勢力として、浦氏が確認される。また、集落内には「立屋敷」など居館の存在を窺わせる小字がみられる。浦城は、浦氏が背後の山に詰めの城として構築したものと考えられる。

### 〔3〕松隈城（志摩町大字松隈）

松隈集落の北側山上に位置する。集落へ通じる道に「ジョウノサカ」の通称地名がみられる。また、麓には「ナカノヤシキ」といった居館の存在を窺わせる通称地名がみられる。

また、史料的价值は落ちるものの、「松隈氏代々記」では、松隈伊賀守が松隈に居城を構えたことあり<sup>(9)</sup>、在地土豪である松隈氏の詰めの城として、山上に城が築かれたものと推察される。

しかしながら、現況の遺構（図5）をみると、遺構としては、北側に曲輪Ⅰがあり、西側に曲輪Ⅱと堀切aがみられる。

曲輪Ⅰは、北側からのルートに対して構築されたものとみられる。また曲輪Ⅱは、西側からのルートに対して構築されている。また堀切アは極めて浅いものである。

松隈城の場合、防御上の要所には、曲輪や堀切が築かれたものの、山頂を削平して曲輪を形成するに至っていない。最小限の土木量を以て、持城を築いた松隈氏の様相を窺うことができる。

### 〔4〕親山城（志摩町大字小金丸）

小金丸地区（志摩郡西部）の親山集落内にある独立丘陵に位置する。丘には「立」という通称地名が確認される。『拾遺』には「今は圃二段半許となれり。三方に岸有。田字を堀廻と云。」とある。また、集落に西側には「西屋敷」という小字が確認される。

築城主体としては、この地区を本貫地とする小金丸氏が想定される。小金丸氏は古くから志摩郡の国人として活動しており、同時代史料にも、志摩郡衆中の有力な構成員として度々登場する。

丘上には二段の削平地がみられる（図6）。しかし現在は、田畑や宅地になっており、地下げによる改変を受けたものと考えられる。このように、現況では、地表面観察などによる詳細なプランの把握は困難である。しかし、地勢条件を踏まえると、基本的なプランは、単郭或いはそれに準じる曲輪配置であったものと想定される。

小金丸氏のように志摩郡内の主要な在地勢力であっても、持城が単郭構造から抜け出せなかった点は注目される。

### 〔5〕臼杵氏端城（福岡市西区今津）

今津湾に面した小高い丘（標高15.7m）に、「城」の小字が確認される。『拾遺』では、臼杵氏端城といて、「今津村の南海に臨める小丘也。丘上今圃となれり。字を城と云。城主重察か墓有。……」と紹介されている。城主である臼杵重察の存在は管見の限り観察されていないが、大神氏と同様に、与力衆として今津に入部した勢力であるとみられる。

現状では、二段程の削平地が丘の上にあり、北側斜面に伝臼杵重察の墓のある削平地が確認さ

れる(図7)。しかしながら、『拾遺』の記述から、近世の段階で既に耕作地になっており、現状の二段の削平地などは後世の改変を経たものと評価される。

現状では詳細な縄張りを窺うことは出来ないが、基本的な縄張り構造は、単郭或いはそれに準じた構造であったものと推察される。

#### 〔6〕水崎城(福岡市西区元岡)

『拾遺』の記述には、「水崎人家の南にある丸山也」とある。しかしながら水崎集落を含めて、周囲は近世期に開かれた干拓地である。集落の北側にある丘陵地が水崎山と呼ばれており、『拾遺』で比定された水崎城はこの山上にあったものと想定される(図8)。山頂には、単体の平坦地が確認できる。

『拾遺』では、在地勢力として、天正期に水崎加賀入道が居たことを紹介している。水崎氏はこの地域を本貫地とした小規模在地勢力であると思われる。水崎城は前掲の戸山城に隣接した場所に位置しているが、土塁や堀切を使いこなす戸山城に対して、水崎城は山上を削平するに留まっている。豊後から入部した大神氏と在地勢力の水崎氏との縄張り技術の差異を窺う上で注目される。

### 〔3-3-2〕明確な遺構を伴わないタイプ(B-1類)

郡内には城郭の存在が確認できるものの、明確な遺構を伴わないタイプがみられる。

#### 〔1〕泊城(前原市大字泊)

泊地区内には、「タチ」と「城崎」の小字がそれぞれ確認される。『筑前国続風土記』(以下、『風土記』と記す)や『拾遺』では、「タチ」・「城崎」「大日堂」・「桂木」に城が構えられたとある<sup>(10)</sup>。泊地区周囲の丘陵地にはこれらの小字が残っており、四箇所に城館が点在したことが確認できる(図9)。

しかしながら、いずれも丘陵地の地形を利用したもので、明確な城郭関連遺構は確認できない。おそらく柵や板塀などの作事物に頼った形状であったことが想定される。泊氏の場合、集落内に一族が分散し、当主への一元化が不十分であったため、土木構築物を伴う城郭を築く段階に至らなかったことが読み取れる。

史料的价值は落ちるものの、『風土記』の中にも、泊氏の一族がそれぞれの城館にて内部抗争をした記述がみられる。現況遺構から看取される様相は、こうした記述に近い様相があったことを裏付けるものである。

#### 〔2〕志摩野城(志摩町大字馬場)

馬場地区の北側に位置する。馬場から桑原へ抜ける山道に「ジョウミチ」という通称地名がある。ルート上にはいくつかの平坦地があるが、いずれも明確な切岸が伴わず、柵や板塀などの作事物に頼った形状であったと思われる。

『風土記』『拾遺』では、古庄氏や馬場氏が守った城として紹介されている。麓の馬場集落には馬場三河の墓などがあり、小規模在地勢力として馬場氏の存在を窺わせる。これらのことから、志摩野城が馬場氏の城郭であったものと考えられる。

#### 〔3〕城角(福岡市西区今津)

今津地区の北西部にある丘陵地の麓には「城角」や「立浦」など城館に関連すると思われる小

字が確認させる。

山頂部（標高80m）は全くの自然地形であるが、北側尾根上に緩やかに伸びる平坦地が確認される。しかしながら明確な切岸などは伴わず、柵や板塀などの作事物に頼った構造と評価できる。

文献史料からは、明確な築城主体は確認できないが、おそらく近郊の小規模在地勢力が用いたものと思われる。

#### [4] 油比城（前原市大字油比）

油比地区の西側にある丘には「ユヒノシロ」という通称地名が確認される。神社の近くには「殿川」という泉などもみられ、油比を本貫地とする由比氏の屋敷があったことが確認されている。

しかしながら、背後の丘陵地には削平地などは確認されず、柵や板塀など作事物に頼った構造と考えられる。

### [3-3-3] 破壊などにより判別困難な城郭遺構

#### [1] 鷺古城（福岡市西区今津）

白杵氏端城の北東にある低い丘は、『拾遺』では鷺古城として「今津村の東にあり。高さ処南北に塚二ツ有。…(中略)…其の東の圃を館屋敷と云」と紹介されている。

丘の西半分は公民館建設の際に削り取られ、かなり破壊されている（図8）。

『拾遺』の記述通り、丘の東側に田圃が広がっており、「館屋敷」の位置が比定される。位置的にみると、鷺古城は「館屋敷」の背後の詰として機能したものと考えられる。

『拾遺』では築城主体として鷺氏を挙げているが、同時代史料からは確認できない。むしろ「館屋敷」に近接する登志社（今津の産神）・四所神社の社人である牧園氏関連の城郭である可能性が想定される<sup>(11)</sup>。

#### [2] 西田城（志摩町大字井田原）

『拾遺』の中で「井田原村古城」として井田原に古城址が紹介されている。井田原地区の西田集落の近くに小さな丘があり、「ジョウノサキ（城ノ前）」「ジョウノツジ（城ノ辻）」という通称地名が確認されている。『拾遺』の記述に「城辻と云ふ」という節があり、この丘が井田原村古城（便宜上、西田城とする）と比定される。

地元の人によると、70年代後半に丘の上に重機を入れたそうで、現在は人家と畑になっている。このため現況遺構は破壊されてしまっている。

『拾遺』からは、近接する吉田地区の高野集落に、古庄氏の屋敷跡があったことが記されている。前述の志摩野城で言及したように、古庄氏はこの近辺にて大友方として活動した在地勢力である。地理的な関係を鑑みて、西田城が古庄氏関連の城郭であると考えられる。

### [3-3-4] 城郭の位置を特定できないタイプ（A類）

城郭の位置を確認できない小規模在地勢力としては、洞氏（桜井・洞）や阿部氏（野北）・檜崎氏（草場）などが確認される。この中には、元岡氏（元岡）のように文献資料に頻繁に出てくる勢力もみられる。

こうした理由としては、周辺諸勢力との相関関係などの要因で、山地や丘陵地における防御的効果よりも、平地居館における作事物などの防御的効果を重視する姿勢を選択した（或いはせざるを

得なかった)ことが想定される。

## 小 結

以上の各事例の検証を踏まえて、表1-1・表1-2・表1-3は作成されている。そしてこれらの志摩郡内の在地諸勢力と山城・丘城の一覧、及び小規模山城・丘城のタイプ分類を纏めたものが、表2。「志摩郡の山城・丘城、および小規模山城・丘城のタイプ分類」である。そして郡内における分布を示したものが、図10である。

## 【4】考 察

ここでは、表2と図10に基づいて、志摩郡における在地諸勢力の権力的様相について考察を行う。

まず第一に、柑子岳城が他の在地諸勢力の城に対して、規模的な面でも縄張り技術の面でも圧倒している点が挙げられる。

柑子岳城は、主郭を中心に複郭の曲輪配置を有している。城主である木付氏が、明確な内部分化を持つ軍団を保有していたことを窺わせる。

これに対して、他の山城・丘城の傾向をみると、16例の内、A：4例、B類10例（内、B-1類：4例、B-2類：6例、B-3類：0例）、開発などにより詳細不明：2例となっており、全て単郭構造の曲輪配置の域を出ない小規模なものである。

この傾向は、郡内の在地諸勢力が第二郭を創出するような軍団の内部分化を生み出さなかったことを示す。勿論、軍団内には、何らかの序列があったものと思われるが、単郭の中で消化されるような性質のものと考えられる。また泊氏のように、当主への求心性が低く、村落内の在地構造に埋没した在地勢力も数多くみられる。これらのことから、志摩郡の在地勢力が村落単位の領主に留まり、地域権力へ成熟できなかったことが読み取れる。

また、外部からの進駐勢力である志摩郡代の影響下において、在地勢力の城郭の規模が抑制されていたことが要因として挙げることができる。

柑子岳城督の軍団構成は、同時代史料からも窺うことができる。大友氏から元岡・小金丸・泊・古庄氏など志摩郡衆に宛てた文書によると、彼らに「好士岳城番」を「各申談堅固可被遂勤番事」と求めている。また、志摩郡衆側から城番へ出す人数がないという注進に対しても、「其間之儀乍辛苦、各申合人数等」と求めている<sup>(12)</sup>。

こうした動員体制の背景には、進駐勢力として規模的にも軍団構成においても圧倒した志摩郡代が、在地諸勢力に対して大きな影響力を及ぼしたことが想定される。

第二点として、各小規模山城・丘城の分布をみると、志摩郡代は、規模や技術の面では他の勢力を圧倒するものの、その権力基盤が不安定であったことが挙げられる。

城郭の類型分布（図10）をみると、柑子岳城周辺にB類の城郭が存在・集中する。中でも、白杵氏や大神氏のように豊後を出自とする与力衆が、柑子岳城の近くにB類の城を持って割拠した点が注目される。

この点に関する比較対象として、木付氏と同様に立花山城督であった戸次立花氏（以下、立花氏と記す）の事例を挙げる。立花氏は、筑前西部の糟屋郡・席田郡（便宜上、立花領とする）に入部した進駐勢力である。

立花領における小規模山城・丘城の一覧を表3に挙げる。これをみると、立花領で確認される27例の小規模山城・丘城の内訳は、A類：10例、B類13例（内、B-1類：4例、B-2類：9例、B-3類：

0例)、破壊により詳細不明：4例となっている。立花領では、4割強を占めるA類の事例が、居城である立花山城周辺に集中している。また豊後を出自とする与力衆をみると、由布氏・小野氏・戸次氏など立花山城下に屋敷跡を伝える程度で、大神氏や臼杵氏のように居城を持たない。

このように、同じ城督であっても、立花氏では、勢力圏内の在地勢力を立花山城に結集させていたことが看取される。こうした支配形態は居城である立花山城の縄張りにも反映され、立花山城は複合城郭群とも言えるような広大な曲輪群を形成している。

立花氏と比べると、木付氏の場合、与力衆が柑子岳城下に集約されず、各自が自律的な行動を取っている。志摩郡では、大神氏や臼杵氏は木付氏の与力衆であるが、彼らは木付氏と同様に豊後を出自とする国人である。このため、木付氏は彼らの自律的行動を容認せざるを得なかったものと推察される。

以上の考察を纏めると、

- 1) 志摩郡の在地諸勢力の山城・丘城は、単郭や村落に埋没したタイプから成り、複郭構造を創出するような軍団構成に到達できなかった。そうした在地の権力的様相の中で、木付氏は、唯一、複郭の曲輪配置を創出するなど、周囲の在地諸勢力から一步抜きん出た軍団構成を形成しており、進駐勢力として在地諸勢力に対して大きな影響を及ぼしていたことが看取される。
- 2) その一方で、軍団構成の基盤となる与力衆が、持城を保有するなど自律的な行動を示しており、木付氏が、彼らの自律的行動をある程度容認した上で、在地諸勢力の統率にあたらざるを得なかったことが看取される。

以上、二点が、志摩郡の城郭群から読み取ることができる志摩郡の権力的様相として指摘される。

## 【おわりに】

本論では、志摩郡の小規模山城・丘城の紹介を中心に、これらの城郭群を踏まえて、若干の考察を行った。

文中でも若干触れているが、志摩郡と立花領での城郭群の比較検討を行うことは、大友氏による城督制度の実態を知る上でも有効な材料を提起するものと思われる。国人領主をはじめ在地勢力の城郭は数多く存在する。今後、これらの丹念な踏査に基づく資料化が求められる。

従来の諸研究では、史料的制約から小規模な在地勢力の具体的内実や国人領主などの広域勢力との相関を検証するには困難を伴ってきた。しかしながら、拠点城郭や小規模山城・丘城の縄張りを史料として検証する縄張り研究においては、在地勢力の社会、権力的様相の検証が可能である。今後も、山城・丘城の縄張り分析に基づいた物証的研究を丹念に押し進めることが期待される。(了)

註

- (1) 北部九州の城郭の様相については、木島孝之・中西義昌（天正中・後期の北部九州における城郭の様相）（鳥栖市教育委員会編『鳥栖の町づくりと歴史・文化講座』〔1998年〕）を参照されたい。
- (2) 拙稿「小規模山城・丘城の縄張り構造にみる小規模在地勢力の様相～筑前糟屋郡・席田郡・志摩郡を中心に～」(『愛知城郭研究報告』4号〔1992年〕)。
- (3) 「文政六年癸未四月十六日志摩郡諸録」（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前町村書上帳』〔1992年、名著出版〕）。
- (4) 編纂史料として、「改正原田記」（福岡県立図書館蔵）、貝原篤信「筑前國統風土記」（『筑前国統風土記』〔1973年、名著出版〕）、青柳種信「筑前國統風土記拾遺」（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前国統風土記拾遺』〔1993年、文献出版〕）、同「筑前町村書上帳」（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前町村書上帳』〔1992年、名著出版〕）などを用いた。
- (5) 筑前西部地域にあっては、早良郡の安楽平城（小田部氏）や怡土郡の高祖城（原田氏）・加布里城（岩隈氏）などでは畝状堅堀群が殆どみられず、土塁を積極的に用いた縄張りプランが展開する。その中で、柑子岳城だけが、畝状堅堀群を積極的に用いている。
- (6) タイプ化の設定については、前掲註（2）を参照されたい。
- (7) 「筑前國統風土記拾遺」卷之（四十八）（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前国統風土記拾遺』〔1993年、文献出版〕下巻）。
- (8) 「筑前國統風土記拾遺」卷之（五十四）（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前国統風土記拾遺』〔1993年、文献出版〕下巻）、以下『拾遺』の引用は全てこの巻からである。
- (9) 「松隈氏代々記」「筑前町村書上帳」（青柳種信／福岡古文書を読む会編校訂『筑前町村書上帳』〔1992年、名著出版〕）。
- (10) 「筑前国統風土記」卷之二十八（貝原篤信「筑前國統風土記」（『筑前国統風土記』〔1973年、名著出版〕）、以下「風土記」の引用は、全てこの巻からである。
- (11) 前掲註（7）参照。
- (12) 「児玉韞採集文書」325、326（『改正原田記附録（福岡県史編纂資料25）』福岡県立図書館蔵）。

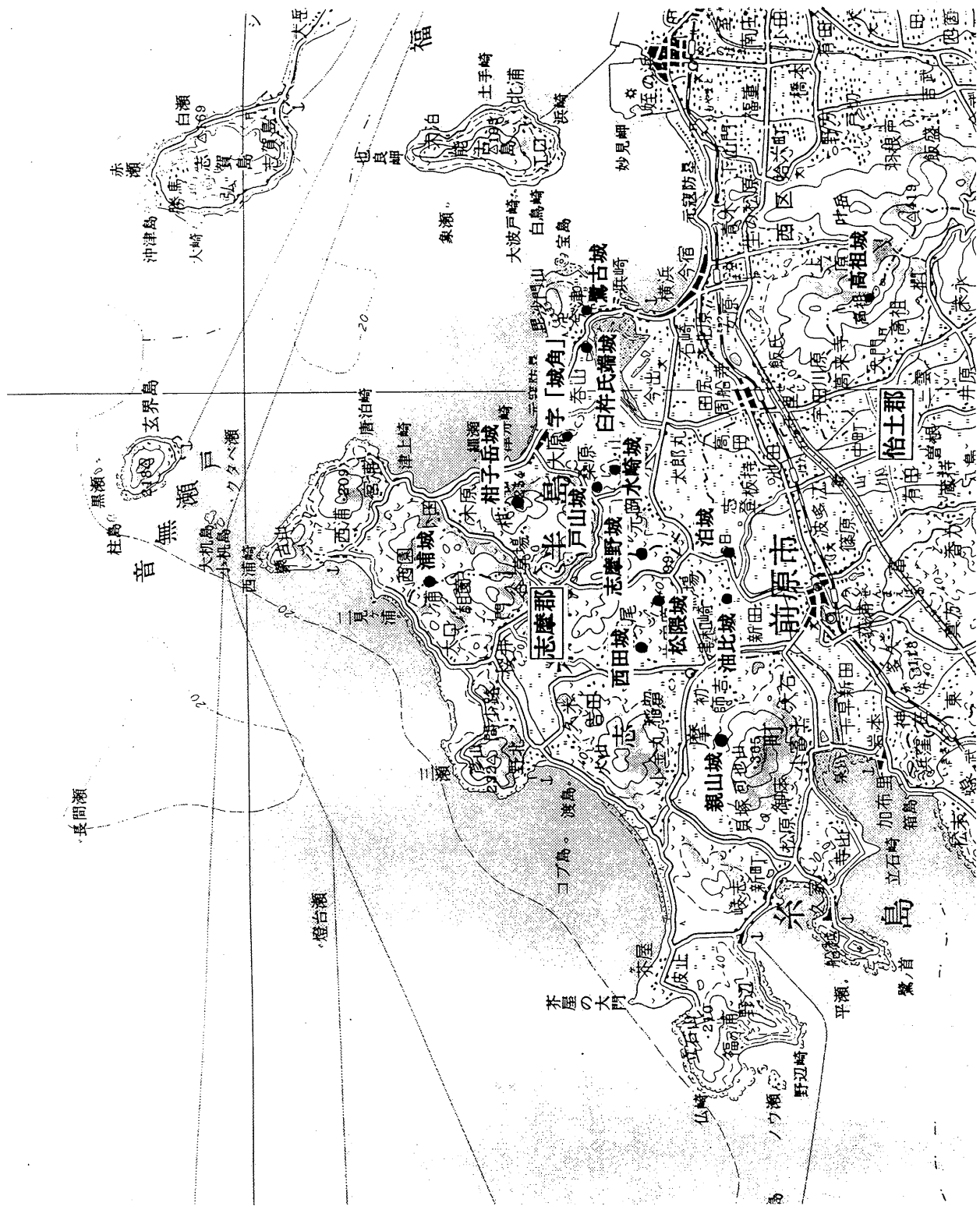


図1. 志摩郡における戦国期城郭(山城・丘城) [国土地理院 1:20,000より作製]

表 1 - 1 志摩郡で確認される山城・丘城

地域	確認される山城・丘城	図版	典拠史料、及び根拠（補足事項）
草場	柑子岳城	図 2	「続風」「拾遺」
今津	白杵端城	図 7	「続風」「拾遺」、小字「城」あり
〃	鷺城	〃	「続風」「拾遺」
〃	小字「城角」		
水崎	水崎城	図 8	「拾遺」
桑原	戸山城	図 3	「拾遺」
泊	泊城	図 9	「続風」「拾遺」、小字「城崎」あり
馬場	志摩野城		「続風」「拾遺」、「ジョウミチ」という通称地名あり
油比	油比城		「ユヒノシロ」という通称地名あり
松隈	松隈城	図 5	「ジョウノサカ」という通称地名あり
吉田・井田原	西田城		「拾遺」、「ジョウノサキ」、「ジョウノツジ」の通称地名あり（現在、遺構消滅）
小金丸	親山城	図 6	「続風」「拾遺」、「タチ」の通称地名あり
浦	浦城	図 4	「拾遺」

「続風」:『筑前国続風土記』

「拾遺」:『筑前国続風土記拾遺』の略。

表 1 - 2 志摩郡で確認される在地諸勢力

地域	確認される在地勢力	典拠史料
志摩郡	大友氏志摩郡代（白杵氏・木村氏）	「原田」「書上」「続風」「拾遺」など
今津	牧園氏、鷺氏、白杵氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
元岡	元岡氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
水崎	水崎氏	「拾遺」
草場	檜崎氏	「拾遺」
桑原	大神氏	「拾遺」
泊	泊氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
馬場	馬場氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
松隈	松隈氏	「原田」「書上」「拾遺」
油比	由比氏	「原田」「書上」「拾遺」
吉田・井田原	古庄氏	「原田」「書上」「続風」
小金丸	小金丸氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
浦	浦氏	「原田」「書上」「続風」「拾遺」
洞	洞氏	「拾遺」「書上」
野北	阿部氏	「拾遺」

「続風」:『筑前国続風土記』 「拾遺」:『筑前国続風土記拾遺』

「書上」:『筑前町村書上帳』 「原田」:『改正原田記』

表1-3 志摩郡で確認される山城・丘城と築城主体

◎大規模な山城・丘城

山城・丘城	在 地 勢 力	典拠史料、および根拠
柑子丘城	大友氏志摩郡代（臼杵氏・木村氏）	「続風」「拾遺」「豊前」など

◎小規模山城・丘城

山城・丘城	在 地 勢 力	典拠史料、および根拠
鷺城	鷺氏或いは牧園氏	「続風」「拾遺」／集落との関係から
臼杵端城	臼杵氏	「続風」「拾遺」
小字「城角」	—	
水崎城	水崎氏	「拾遺」
戸山城	大神氏	集落との位置関係から
泊城	泊氏	「続風」
志摩野城	古庄氏・馬場氏	「続風」「拾遺」
松隈城	松隈氏	「続風」「拾遺」
西田城	古庄氏	集落との位置関係から
親山城	小金丸氏	「続風」「拾遺」
浦城	浦氏	「拾遺」
油比城	由比氏	集落との位置関係から

—：不明なもの

※「続風」:「筑前國続風土記」 「拾遺」:「筑前國続風土記拾遺」 「豊前」:「豊前覚書」

表2 志摩郡の山城・丘城および小規模山城・丘城のタイプ分類

◎大規模な山城・丘城

地 域	在 地 勢 力	山城・丘城	
草場	大友志摩郡代（臼杵氏・木村氏）	柑子岳城	—

◎小規模山城・丘城

地 域	在 地 勢 力	山城・丘城	小規模山城・丘城のタイプ
今津	臼杵氏	臼杵端城	B-2
〃	鷺氏、或いは牧園氏	鷺城	—
〃	×	小字「城角」	B-1
元岡	元岡氏	×	A
水崎	水崎氏	水崎城	B-2
桑原	大神氏	戸山城	B-2
草場	榑崎氏	×	A
桜井・洞	洞氏	×	A
桜井・浦	浦氏	浦城	A
泊	泊氏	泊城	B-1
馬場	馬場氏	志摩野城	B-1
松隈	松隈氏	松隈城	B-2
油比	由比氏	油比城	B-1
野北	阿部氏	×	A
吉田・井田原	古庄氏	西田城（遺構消滅）	—
小金丸	小金丸氏	親山城	B-2

×：遺構や文献史料から、築城主体や城郭の存在が確認されないもの

—：遺構が破壊・消滅するなどして、タイプ化が不可能なもの。

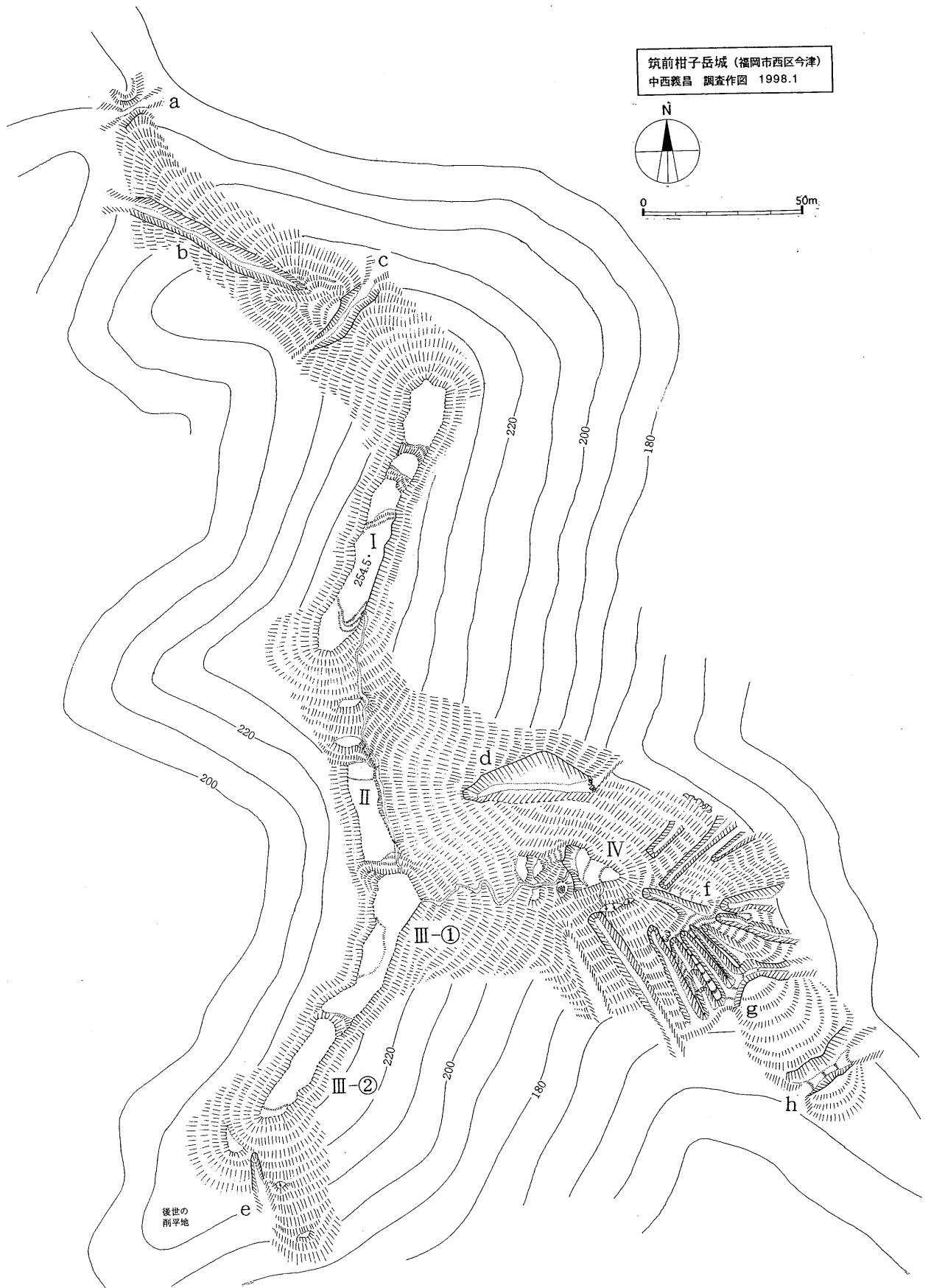


図 2. 柑子岳城図〔中西義昌 調査/作図〕

筑前戸山城(福岡市西区桑原)  
中西 義昌 調査作図 1998.10

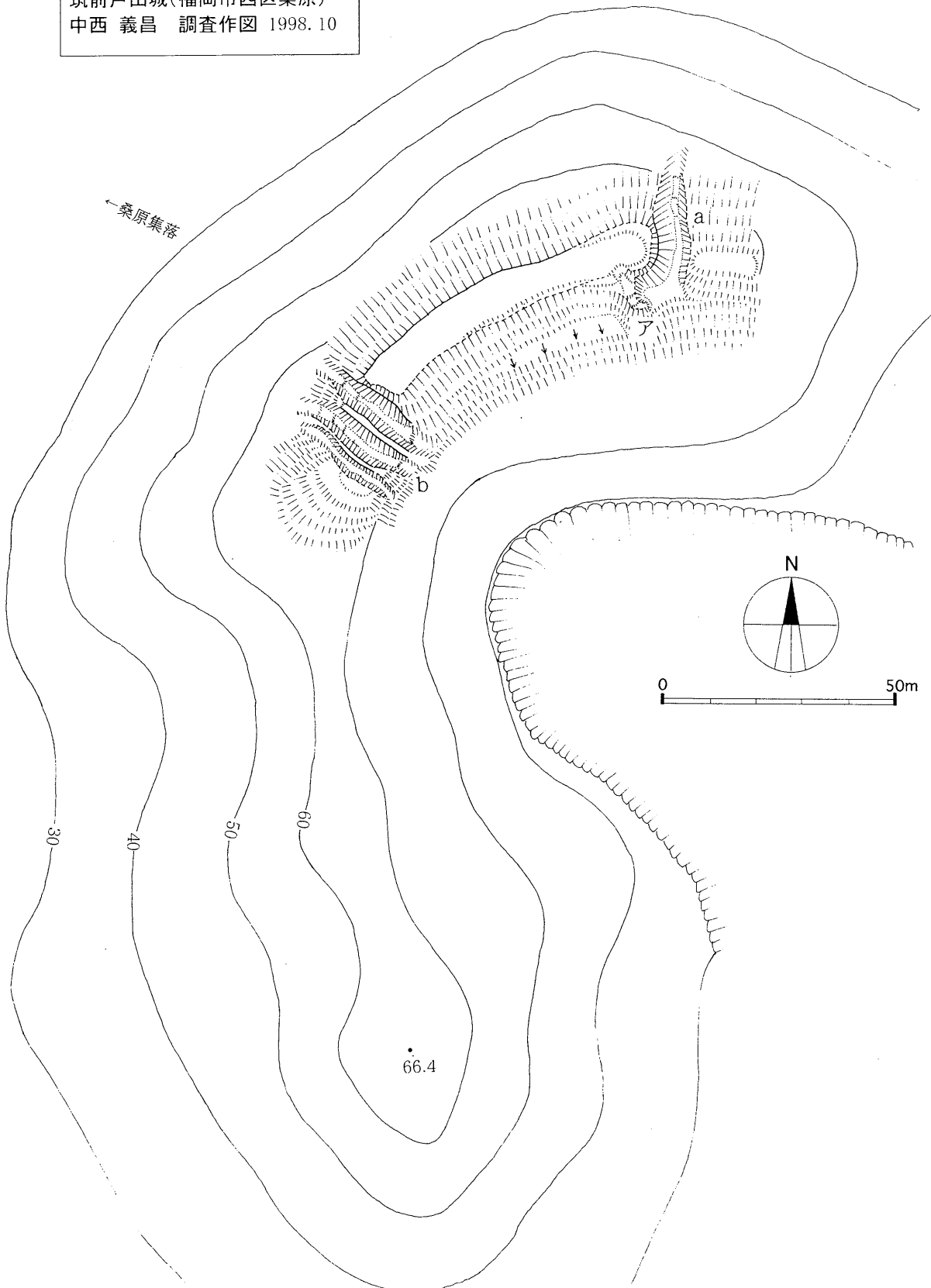


图 3. 戸山城図〔中西義昌 調査/作図〕

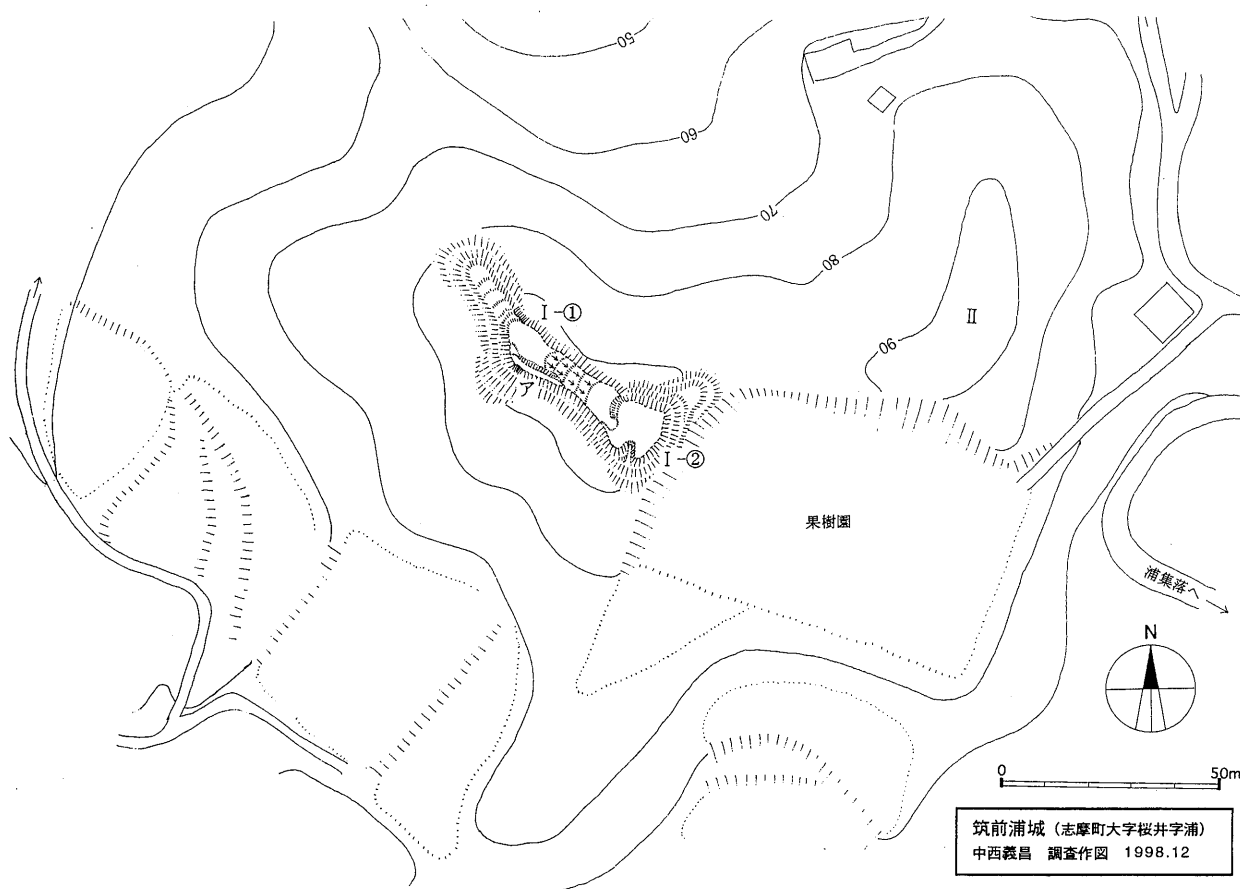


図4. 浦城図〔中西義昌 調査/作図〕

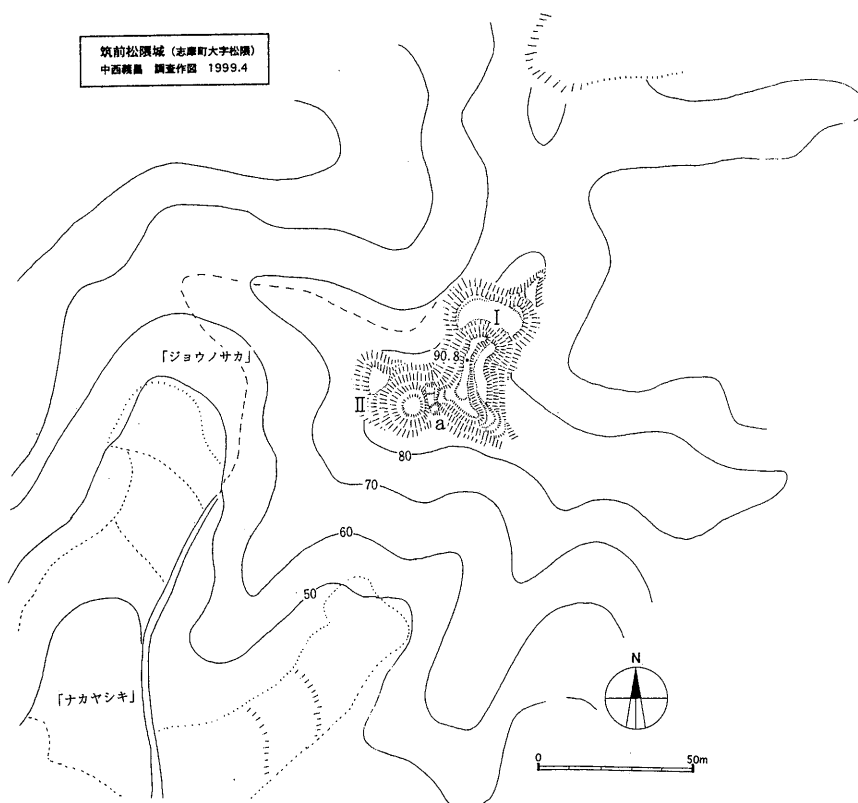


図5. 松隈城図〔中西義昌 調査/作図〕

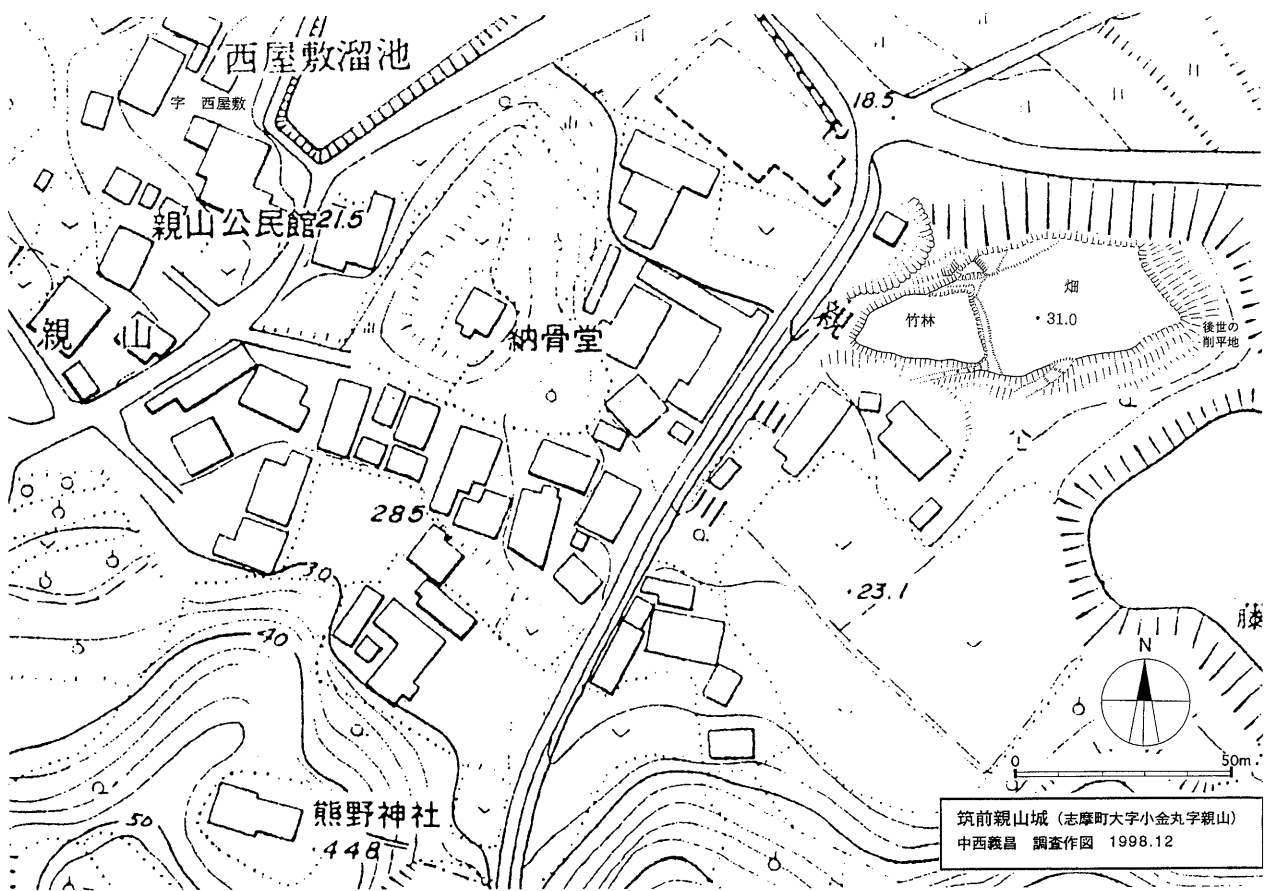


図6. 親山城図〔中西義昌 調査/作図〕

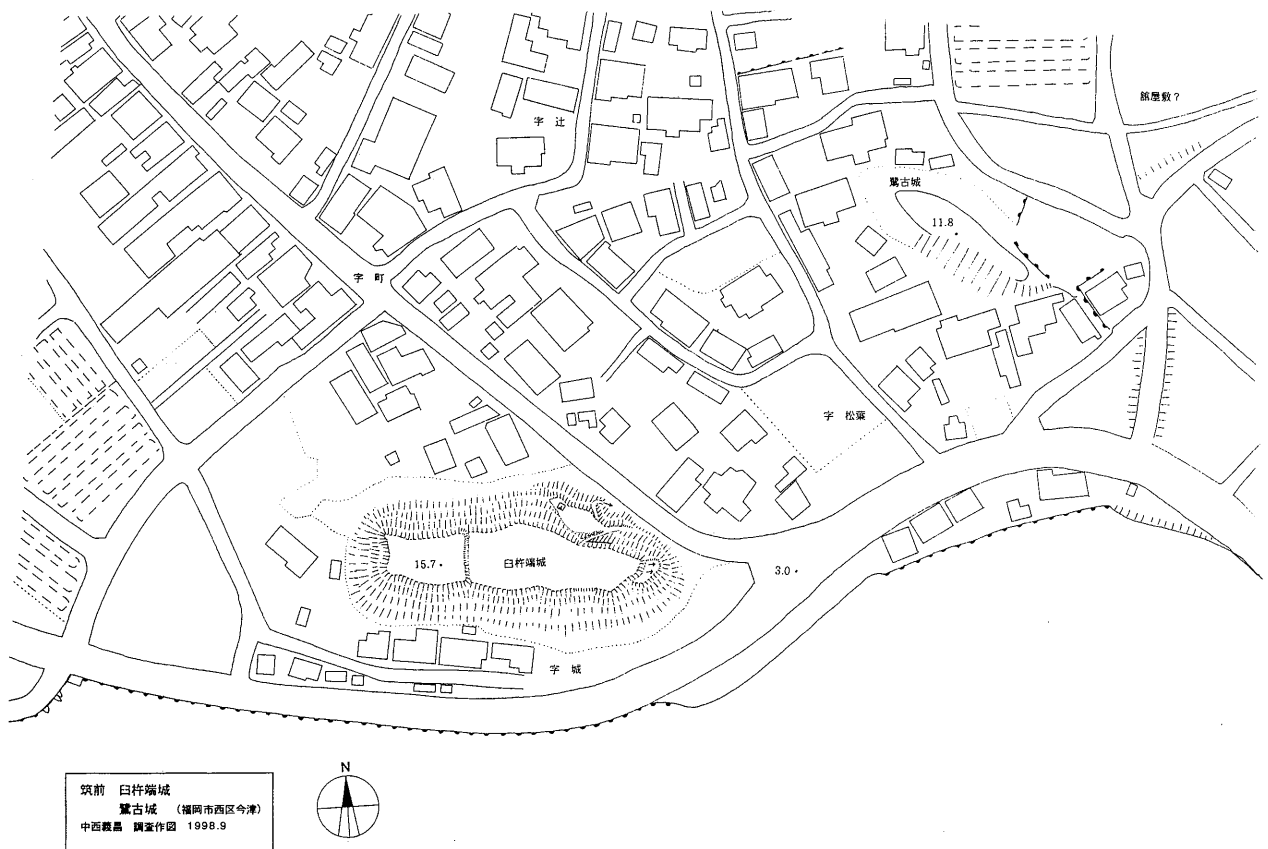


図7. 白杵氏端城・鷺古城図〔中西義昌 調査/作図〕

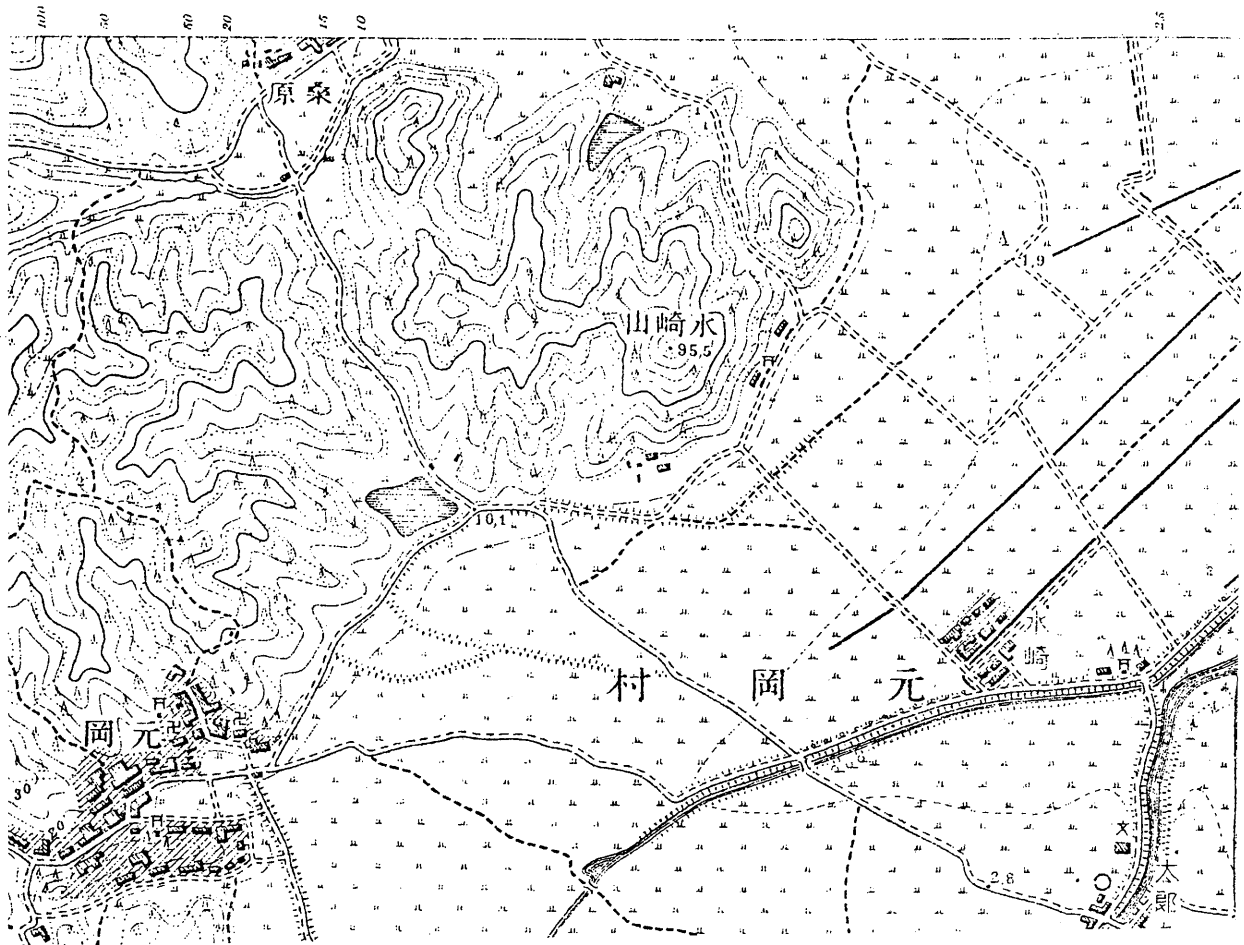


図8. 水崎山（水崎城）〔明治20年実測地図「今津」より抜粋〕

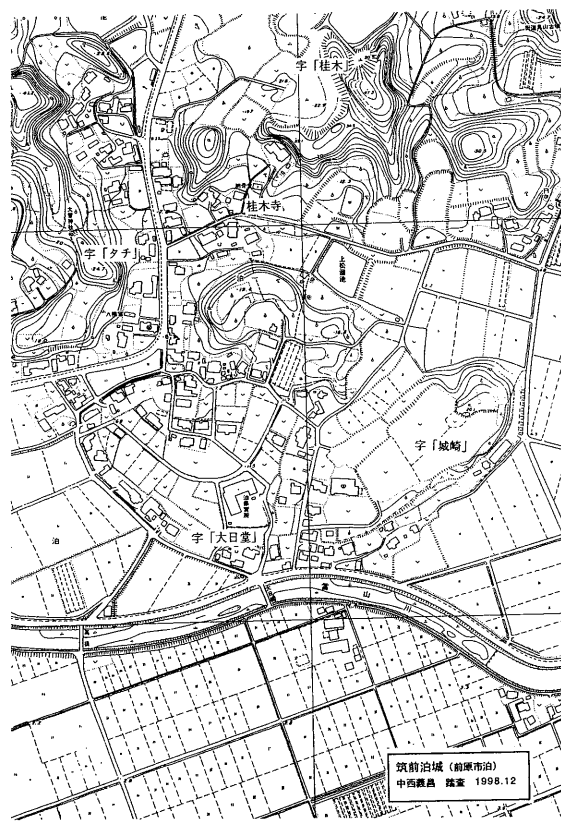


図9. 泊城（「夕チ」「城崎」「桂木」「大日堂」）図〔中西義昌 調査〕



表3 糟屋郡・席田郡の山城・丘城および小規模山城・丘城のタイプの分類

◎大規模な山城・丘城

地域	在地勢力	山城・丘城	
立花山	戸次系立花氏	立花山城	—

◎小規模山城・丘城

地域	在地勢力	山城・丘城	タイプ
<b>【糟屋郡】</b>			
鷹野	鷹野氏〔鷹野党〕	鶉岳城	B-2
〃	鷹野氏〔鷹野党〕	白ヶ岳城	B-2
米多比	米多比氏〔米多比党〕	米多比城	B-2
筵内	北崎氏〔〔院内衆〕カ〕	鷺白城	B-1
西郷	河津氏〔院内西郷党〕	亀山城	B-2
青柳	野田氏、又は中野氏	古子城	B-2
〃	不明	青柳新城（遺構消滅）	—
〃	不明	四万城（遺構消滅）	—
上府	横大路氏、森氏、安武氏、中野氏	×	A
下府	富永氏	×	A
三代	森氏	×	A
三苦	三苦氏〔三苦党〕	×	A
和白	安河内氏カ	「和白村陣所」の記述あり。	A
池田	武内氏〔池田党〕	御飯ノ山城	B-2
八田	〔八田党〕	×	A
土井多々良	〔土井多々良党〕	×	A
蒲田	〔蒲田〕	×	A
江辻	〔江辻〕	×	A
猪野	〔猪野〕	×	A
山田	〔山田〕	上山田城	B-2
久原	久芳氏、又は城戸氏、又は荒津氏	小字「葛城」	B-1
名島	不明	名島城（小早川氏の築城により、遺構 （山地や丘陵地がない）	—
箱崎	筥崎座主坊〔筥崎党〕		—
宇美	神武氏・安河内氏・桜井氏	賀良山東城	B-1
〃	神武氏・安河内氏・桜井氏	賀良山西城	B-2
<b>【席田郡】</b>			
下臼井	今泉氏（席田党）カ）	中山城	B-1
月隈	安河内氏・光安氏〔席田党〕	稻居塚城（「筵田之切寄」カ）	B-2

〔 〕：「立花懐覧記」「豊前覚書」の記録に出てくる党の名称。

×：遺構や文献史料から、城郭の存在が確認されないもの

—：遺構が消滅したり、山地や丘陵地がないため、タイプ化が不可能なもの。